**金龍水**〔室町頭柳原の南町、西側人家茶亭の傍にあり。京師の名水の中にして水軽く清冷にて寒暑に増減なし、茶の湯に可なりとて遠近より乞求む。紫野大徳寺大心和尚の銘文あり、板面に書して井上に掲る〕

〔原此地は、足利三代将軍義満公の館にして花御所といひ、又室町殿とも称す。殿舎には金銀珠玉を鏤め、庭中には百花千艸を聚む、此所は殿内泉殿の旧蹟ならん。今近隣の町を総門町築山町となづく、四方の巡に堀あり、後太平記に見へたり。東西に四ツ足門あり、応仁記に載たり。永徳元年二月後円融院此所に行幸あり、応永二年四月後小松院も行幸し給ふ、同年四月義満公北山に金閣をいとなみて此所を子息義持公に譲り給ふ〕

〔南方紀伝云、永和四年の春三月、将軍花亭にわたましあり、室町殿と号す、其館に色〳〵の花の数をつくし植られけるゆへに、時の人花御所と申なり〕

〔花御所行幸記云、永亨九年十月一日、御路は東洞院を南に行き、中御門を西へ行き、室町を北へ、武者小路を東に、今出川を北へ、北小路を西に行きて室町殿の四ツ足門に至る。管見記云、永亨十一月廿一日室町泉殿御移徒也〕

**毘沙門堂**〔烏丸北頭柳辻子にあり、相国寺塔頭西の入口なり。傍に稲荷庚申の社あり〕

本尊毘沙門天〔聖徳太子の作。寺説云、足利義満公三百六十尺の塔を建給ふ、応仁に滅びて旧地を今塔之段といふ。

其北に毘沙門堂あり、此時の本尊なりとぞ。又其頃は北辺の毘沙門堂ともいふ、此堂は大塔より已前の建立と見へたり〕

〔明月記云、貞永二年二月廿一日丙午、毘沙門堂の花半開くと云云〕

〔後愚昧記云、応安二年二月十九日毘沙門堂に向て花一見すと云云〕

〔こゝに近年、今出川飛鳥井町の辺に毘沙門天を信ずる賈人あり、宝暦十三年五月廿一日の夜、天王夢中に告て曰、是よりひがしの大寺に毘沙門の像あり、年歴久遠にして知るものなし、汝速に出して諸人に結縁させよと、つゞいて三夜同夢を見る。不思議に思ひ、即ひがしの大寺は相国寺ならんと、かの寺に至り衆僧に霊夢を語る。一人の比丘事の次手に山門の中重へ登りしに、はからずも此尊像を得たり、常に人の登らざる所ゆへしるものなし。かの人の霊夢を語りて一山の僧侶に拝せしむれば、人々奇異とし、即かの賈人を呼び来り、夢中の尊容に違はずと感涙せきあへず、因レ■尊像を修補しこゝに安置す〕

**宝慈院**　〔室町頭中木下町にあり、禅宗日野家の領として公家の尼公院主したまふ〕

本尊阿弥陀仏　〔春日の作、坐像一丈許、四十八願巡の第十三番なり。開基は無外法尼、其先は城陸奥守の女にして名を千代野姫といふ、故にこゝを千代野寺ともなづく〕

**道正菴稲荷社**〔局所の西道正の辻子にあり。道正伝曰、俗姓は片山隆盈、越前国永平寺の開祖道元和尚に随身して中華に渡り、和尚所々経回の折柄、隆盈山中にして俄に病発り、既に息絶んとす。時に一人の老翁忽然として現れ、霊薬を授るに疾忽に痊ぬ。かの翁隆盈に言、汝跋砂を辞せずして師に従ふの志深し、今用ゆる所の薬方を授く、本朝に帰つて子孫に伝へ諸人の病苦を救ふべし、我れは是日本三ツの峯稲荷明神なりと、言終つて見へず。道元和尚其頃は深草里に禅刹を営給ふ、隆盈髪を剃て道正と名乗、常に三ツの峯稲荷社へ参詣す、神感ありて此解毒円の霊方を得て、今に至り三十余代家名相続し、曹洞宗一派の寄宿所とし、解毒円を諸国に弘む。是皆稲荷大明神の冥助によるものなり〕

**大峯殿**〔西洞院一条の北、大峯辻子西側に大石塔めり、古へは此所寺院にして役行者の作り給ふといふ、故に大峯殿と称す。甚古代の形にして、塔面に仏像を鐫、今町中の持物となる、旧記紛失す〕

今昔物語曰　京に外術といふ事を好で役とする下衆法師ありけり。隣にありける若き男、此法師の家に行て此事習んと切々に云ければ、法師が云、此事輙く人に伝ふ事に非ず、と云て速にも教ざりけるを。男懇に習んと云ければ、七日堅固精進して法師を前に立て、行とも思へず山の中を遥々と行に、巳の時許に成つて山中によく造りたる僧坊あり。障子を曳開て、■長なる僧の出来ぬ。法師此老僧に向ふて、此男なんこゝに宮仕せんとぞ、さらばこなたへ呼べといへば、男は柴垣の辺に居たり。房主の僧曰、其男の懐に刀差たるぞ捜せといふ、若き僧馳寄て男の懐を捜さ

んとするに、密に懐なる刀を抜儲て老僧に飛かゝる。其時忽に老僧きへ失ぬ。漸あつて此所はいづくなるやと思へば、大いなる堂に只ひとりなん坐したり、遥に来りぬると思ひつれども、一条西洞院にてなんありける。是ぞ大峯殿といふ寺に来りたるなりけり。